

# 助詞「の」のアクセントについての一考察

——室町・江戸時代を中心に——

上野和昭

なお、以下●はアクセントの高拍、○●●はそれぞれ同じく低拍、上昇拍、下降拍を示すことにする。

## 二

アクセントの体系変化によって、低平型のアクセントは○●●●●、○○○●●●●●のようになり、はじめから二つ以上低拍の連続する型も○○●●●●●、○○○●●●●●などに変化した。前者は最後の一拍以外はみな高くなるものであり、後者には以前高かった拍よりも二つ前の拍までが高くなるという共通性がある。

ところで、従来アクセントの史的研究は、文節を単位として行われてきた。それはもちろんそれとして意味のあることであるが、ときにもっと広く連文節をアクセントの単位として扱わなければならぬ場合もある。

そのような例を『平家正節』<sup>(1)</sup>の中から拾ってみる(上・上)は高拍、(中・×(無譜))は低拍をあらわす。以下同様。

日本語アクセント史上、南北朝の頃が体系的な変化の時期に当たるとされるが、助詞「の」について考える場合も、その前後で様相が変わる。幸いにして体系変化以前の様子は、桜井茂治(一九六〇)・金田一春彦(一九六四)・鈴木豊(一九八一)などの研究によってその詳細が明らかにされ、規則性も論ぜられている。しかし、それ以後については、奥村三雄(一九八一)・桜井(一九八四)といった研究成果があるとはいえ、なお例を補い、解釈に異見をさしはさむ余地も残っているように思われるので、ここに次の点についての私見を申し述べたい。

それは、古く低平型の語に「の」が接続した場合、室町以降その文節全体が高平型になったり、助詞の部分だけが低くなったりする現象についてである。このことは、従来文節単位で説明されがちであったが、ここでは室町期から江戸期のアクセント資料を検討して、いささかなりとも見直しをしようと思う。

山の内のへ上上×××××  
揃物大衆三六一口説

山の奥にへ上上。上××××  
読物文勸 一 2口説

山の手がへ上上。上×××  
4下老馬 一 5口説

右は「山の」の例であるが、なぜ同じ語に付きながら「の」のアクセントに差があるのか。それは後統語のアクセントが異なるからである、と考える。「内・奥・手」は古くそれぞれ●○、○●、○であるから、体系変化に際して次のように変わったと考えられる。

山の内に ○○○●○○○

山の奥に ○○○●○○○

山の手が ○○○●○○○

そして、その結果が平曲の譜記に反映したものと解する。

二拍の漢語に「の」が付いた場合も同様である。「一の」の例を挙げると次のようになる。

いちのかみこそへ上上上××××  
間物鶺鴒川 六 2白声

一の谷へ上上上××  
5下判官 九 4白声

一人のへ上上××××  
10下若宮三二 2口説

一の御子へ上上××××  
4下那都二〇 2口説

一の宮のへ上。上××××  
3上額打 二 2口説

古く「一」は○○、「上・谷・人・御子・宮」はそれぞれ●○、○○、●●、●●であったから、「山の」と同じ原理で説明できる。ただし、「一の宮の」にはへ上上上××××という譜記もみられ、東大本のほか京大本・尾崎本・早大本などみな同譜記であるが、ひとり芸大本のみへ上上××××と規則的である

ことから、誤写の可能性もなしとしない。

このように、アクセントの変化の単位を、臨時的な場合を含むとはいえず、連文節におく方がむしろ妥当性をもつ場合があるということは、秋永一枝(一九八〇)で「物の名・玉の緒」のごときが古く「複合が強く一語のようになつて」いたことが指摘されている(53頁)ことからも容易に理解される。そのような複合が、体系変化を経て、「の」のアクセントに端的にあらわれてきたと考えられるのである。

ただここで注意すべきは、古く低平型アクセントの語に助詞「の」が接続しているといっても、すべての場合に後統語の影響を被るかという点、それは必ずしもそうではないということである。奥村(一九八一)で説かれるように、文節単位で考えた方がよい場合もある。

そこで、『平家正節』にあらわれる二拍名詞第三類(古く○○)の語に助詞「の」が接続した場合についてみると、このような条件をみたす語「明日・池・犬(戌)・家・馬・親・髪・岸・草・雲・事・舌・潮・島・太刀・玉・月・土・綱・時・年・波・墓・浜・節・物・山・弓・夢」のすべてにわたって、「の」には●●▼を反映する譜記が付けられている。一方●●▽は、「家・玉・波・物・山」の五語にしかみられない。それも「家の子・波の上・物の具・武士・山の内」などといった複合語またはそれに準じて発音されがちなもののみである。

ところで、当然のことながら、「の」●●▼の方にも後統語の影響を被っているものが含まれているわけで、●●▼だからと

いってすべて文節単位で処理してよいとばかりはいえないこと、前掲の例からも明らかである。文節単位で考える場合は、●●▽から●●▼への変化を想定して、両型みえるときにはその過渡的状況を反映するものと解釈するのであるが、それならば「口説」と「白声」との間でなんらかの傾向の差を看取できそうなものがある。しかし、平曲譜本にそのような痕跡を認めることは難しい。わずかに「波の上」で、「口説」と「白声」との間に有意の差があるうかと疑われる程度である。

波の上へ上上上××××

14下小幸一四口説

波の上へ上上××××

6下山幸一八白声

波の上へ上上××××

5下緒環 二三口説

波の上へ上上××××

5下逆櫓 二三口説

波の上へ上上××××

15下門渡 二一口説

波の上へ上上××××

15上三日一八白声

波の上へ上上××××

15上三日二五白声

しかし、「波の上」は「堯の代」「堯の心」(注2参照)と比較しても、その臨時的複合度に遜色はないものと思われる。したがってこれを文節単位ではかり考える必要はないのであって、○○○●○●●○○○のような変化を想定してもよいであろう。その場合は、「波の上」●●○○○が「の」●●▽●●▼という文節単位の変化に影響され、これに類推して●●○○○となりつつあったが、それが「白声」の二例にあらわれたと解釈することになる。

要するに、古く「低平型」(二拍名詞) + 「の」に高起式の語が

続く場合には、平曲で「の」●●▽型を反映する譜記が付いていれば、後統語の影響を受けている可能性があり、●●▼型を反映する譜記が付いていれば、その可能性は低い、ということである。逆に低起式の語が続く場合には、平曲で「の」●●▼型を反映する譜記が付いていれば、後統語の影響を受けている可能性があり、●●▽型を反映する譜記が付いていれば、むしろ文節単位で変化を考えた方がよいことになる。

たとえば「玉の井」は、「井」が古く○であるから、全体ひとまとまりが体系変化の時期を経たのであれば●●●○となるはずで、平曲に●●○を思わせる譜記があるのは、文節ごとに変化を遂げて新たに複合へと向かったことを物語っているのかもしれない。

さて、このように臨時的な場合も含むとはいえず、連文節を単位としてアクセント変化を説明しようとする見方に対して、奥村(一九八)はきわめて慎重で、「山ノ類」○○▽(中前期頃)↓●●▽(平曲資料)(44頁)として、文節単位の変化を主に考えられ、●●▼型については、

平曲資料における山ノ類のアクセントとして、●●○型の他●●●型が多数存するのはやや問題だが、つまりは後統語との複合による平板化現象と見るべきだろう(44頁)

と述べられる。もちろん、このように文節単位で割り切って解釈することも可能ではあるが、事態は前述のように、いまま少し複雑なものではなからうか。

以上は二拍語についての考察であったが、ここでは一・二拍語の例から少しく補いたい。

旧国名に「の守」「の国」が接続したいくつものものも、それを全体として扱った方が、平曲の譜記を的確に解釈できる場合がある。

上総の守へ上上上、上×××  
 上総の国へ上上上、上×××  
 7上東下 二2口説  
 3下平流 二3口説

右の「上総」は『曆仁本古語拾遺』に「平濁平」、『言語国訛』に「へ一」<sup>(5)</sup>とあって、おそらく○○○▽●●●○（現代京都○●○）または●○○○という変化を経たものと思われる。また、「守」は古く○○●、「国」は●●であるから、全体としては左のような変化を想定でき、その結果が平曲に反映しているものと考えたい。

上総の守 ○○○○○○▽●●●○○○  
 上総の国 ○○○○○○▽●●●○○○

このような考え方は、たとえば「信濃」のアクセントを推定する場合にも有効である。「信濃」は『言語国訛』で「へ一」<sup>(8)</sup>、平曲でも単独で「へ上上××へ上、上××とあって、近世●●○○（現代京都●○○）であるが、体系変化以前にどうであったかは、確かな資料に恵まれていない。ただひとつ『袖中抄』に「平平上（?）」と見え、第三拍の声点の位置に疑問を残すが、そのものは「平平平」を意図していただのはないかと想像する。それは「信濃の国」に付けられた平曲の譜記が、次のようであることによる。

信濃の国にへ上上、上×××××  
 交上善光 一2口説

これは「上総の国」の譜記と全く同じで、「信濃」も「上総」同様古く○○○○型のアクセントであったことを教えているものと解釈する。

一拍名詞第三類所属語に「の」が接続する場合も、同様な経緯を考える。しかし、この類の語は室町時代からは低平型ではなくて○●のようになったことに注意しなくてはならない。現代、京都では「の」○○▽、和歌山県田辺市では○○▽<sup>(10)</sup>であるから、平曲の次の例はこれに連なるものであろう。

野の行幸のへ中上上中中中  
 小秘延喜一五四指声

目の様ウなるへ×上、上××××  
 10上物怪 七4口説

ところが平曲には、「の」に●▽、●▽というアクセントを反映する譜記もみられる。

火の中へ上上中中  
 8下惟落 一一二指声

へ上上×××  
 5句高野 五3白声

目の前にへ上上××××  
 5上燈籠 二1口説

目の前にてへ上上××××  
 8下能登一六3白声

右は「火の中」「目の前」が古くそれぞれ○○○○、○○○○であったことを思えば、全体をひとまとまりとして●●○○に変化した結果と考えられよう。桜井（一九八四）は、「仮名声」に「目ノ前ニ」（微徴角徴角）とあることから、「目の」部分は○▽▽●▽と変化したものとされる（18頁）。たしかにこのような節博士があれば、体系変化の過渡的状況とでも説明しないかぎりには、文節単位での変化を考えざるをえない。ここは二様の経緯を認めるべ

きであろうか。

手の舞イへ上××××

12 上行隆一七3口説

二の舞へ上××××

読下木牒 三4口説

二の宮へ上××××

4 下那都一四3白声

四の宮へ上××××

6 下山幸二一4口説

右は、「舞・宮」ともに●●であることから、体系変化後は●○

○○となつてよい。また、「木の葉」「木の実」などに●○○を反

映する譜記があるのも同様に考えられる。

しかし、奥村(一九八二)はここでも慎重な態度をとり、「絵の

具・火の粉・木の子・木の芽」が現代京都で●○○型であること

を、「くの」○▽を受け継ぐものと解釈される(40頁)が、小論の

立場からすれば、「木の子」は○○●●▽○○○、「絵の具・火の粉

木の芽」は○○○○▽●●○○○という変化であつたとみたい。

ただし「根の井」へ上××××、「田の浦」へ上××××については、

説明がつかない。これらは姓・地名の類で、先の「玉の井」とも

四

ここで時代を遡って『補忘記』<sup>(14)</sup>の例をみると、和語の「低平型

十」の「」は少ない。

ユメノ(徴徴後)

貞48・2

右は文節単位で説明すべきものと思うが、左は「堀池」が古く○○であつたとすれば、後統語「僧正」●○○○の影響も考えら

れる。

ホリケノ(徴徴徴)

僧へ去/角へ正へ平濁/角へ

元35・2

漢語の場合は、そのほとんどが高平化しており、必ずしもすべてに後統語との関係を取看できるわけではないが、ただ二例のみ「の」が低く付いているものがある。

自へ平濁/徴へ性へ平/徴へ之(角)言へ上濁/角へ

元126・3

自へ平濁/徴へ證へ平/徴へ之(角)位(角角角)

元128・3

これらは、いずれも「言」●●、「位」●●であるから、本来低平型の語に続く「の」がアクセント変化の結果低くなるのも理解できる。

『補忘記』には、本来の低平型の語に「の」が付いて、後統語からの影響を被らずに高平型になっているものも、左のほかに二例(元禄版)指摘できる。

一へ入/徴へ念へ平/徴へ(徴)阿へ上/徴へ字へ平濁/角へ

貞2・6

元22・2

これらは文節単位で変化して、いったん「一念ノ」●●●●▽となり、さらに複合の力によって●●●●▽と平板化したものと説明する以外にはない。

しかし『補忘記』は、「低平型十」の「」が高平型にばかりなっ

ている資料ではないのであって、後統語の影響を被ったとみられるものも混在していること、すでに述べたとおりである。

ここに思い合わされるのは、尾崎知光氏蔵『四声并出合読誦私記』にある助詞「の」のアクセントについての記載である。

▽ノノ假名ハ本字ニツル、ト雖氏下キ、字ニ附ク時キ□下タニ高キ字有レハヲトス「有リ例セハ如二十△フ入濁ノ微」地△平濁ノ微▽ノ(角)苦△ノノ微▽薩△入ノ角△世△微」々△微」ノ(角)衆△微」生△微」等ノ一

▽ノハ連ル、トイヘ氏大都ナリ其故ハ高キ字ノノカナハ□テツレル若シ下キ、字ニツクノノカナハ下ニ高キ字有レ之時ハ落シテ下タヲ高フス (5オ)

これについて桜井(一九八三)は、『補忘記』の「自性ノ言」「自證ノ位」の節博士と比較して、「の」の後統語が本書ではもとのままのアクセントであることを指摘され、これを「まだ、変化が完了していない途中の段階を示している」ものと解された。

このように、不完全なあたりではあるが、論議書に「低平型」の「の」のアクセントが後統語との関係において法則的に記述されているということは、小論の趣旨ときわめてよく符合するものである。

つきに、これも室町時代のアクセント資料として紹介されている『名目抄』(16)を検討してみる。

古く低平型の和語に助詞「の」が付いた例は左のとおりである。

鬼、間 △上上平平

禁中所々名篇 16 (17)

棹、間 △上上平平

禁中所々名篇 25

時、簡 △上上上上濁

雜物篇 45

時、繪 △上上上平

衣服篇 55 (60)・57 (58)

「鬼間」「棹間」は、○○○○●●○○○の変化によるものとみる。「時簡」と「時繪」は文節単位で考えるべきもので、前者は「時の」が○○○▽●●▽▽●●●▽となつた。後者は、「時繪」が古く○○○という確証はないが、この差声からすれば、そう考えるのがもっともよい。これは○○○▽▽●●●▽の段階でとどまっているものとみる。なお、「棹間」について「上上上平」という声点群書類従本と神原文庫本にみられるが、両本とも陽明文庫本・内閣文庫本と比較して、後の分析的差声(複合ないしそれに準ずる語の構成成分だけを取り出し、そのみのアクセントを差声すること)であろうと思われる。すなわち、「上上上平」に対して「間」のみの声点を訂正したと考えられるのである。したがって、これを文節単位の変化の結果●●▽となつた例のひとつに数えるのは躊躇される。

漢語に「の」が続く場合は、まず次の例を検討したい。

一、人 △上上平平

人牀篇 28

金 △上上上平

魚 △上濁 △袋 △平

衣服篇 67 (68)

銀 △上上濁上平

魚 △上濁 △袋 △平

衣服篇 68 (69)

「一人」は平曲でも同様に●○○○を反映する譜記がみられる

が、これも人●○であるから、全体として規則的に変化した可能性が強い。また、「金」も「銀」もともに漢音平声であるが、こちらは文節単位の変化を遂げたものと解釈する。

神原文庫本が「一人」にへ上上上平上平の声点を差すのは、後の分析的差声であろう。「金の」には右記のほかに、群書類従本へ上上平平、多和文庫本へ上上上上<sup>(19)</sup>という声点もみられる。群書類従本は「金」一語の新しいアクセント(○○▽●●)を記入したものとみられるのに対し、多和文庫本の方は「金の」という文節単位の変化の後に後続語への複合の力によって平板化したものと考えられる。

ところで、「上」に付けられた声点は説明に困る。この語は、前掲のように平曲にもあって、全体として○○○○▽●●●○○○という規則的な変化を遂げたものと解せられるが、「名目抄」には次のような声点が付けられている。

一、へ平上平上平

人跡篇35頁

「上」は○●であるから、全体として変化したなら、「の」は高く付いてほしいところである。「上」には平声点があるが、差声方式が新しいので、「上上」●○○○○を意図したものであろう。群書類従本などは、傍訓「ノカミ」にへ上上平上と差声する。これは、「上」を「守」(平曲で●●)とみなしての分析的差声と考えたい。また、多和・神原両文庫本にへ上上平上平とあるのは、旧来の差声方式で加点了ものである。こうしてみると、「上上」のアクセントは室町江戸の頃、●●●○○○と●○○○○○との両様

であったということになろうか。

## 五

以上、古く低平型の語に助詞「の」が続く場合のアクセントについて、体系変化後の様子を概観してきた。これについては、すでに金田一(一九七二)に左のような見解が述べられている。

次にこれらの語(引用者注)に拍名詞第三類に助詞「の」がついた形は、訓点抄時代までは○○▽型であったが、名目抄時代には●●▽型になり、補忘記時代には現代のような●●▽型になったと見られる。(中略)●●▽型▽●●▽型の変化の方は、これはちょっと複雑な事情があり、「の」という助詞が次に来る語が高くはじまる場合には●●▽型になったが、低くはじまる場合には●●▽型になったのではなからうか。それが●●▽型の方は、第1類名詞+「の」の場合のアクセントと同じであり、また「の」がついた形が平板型であることは連体語というその職能から言っても好ましいので●●▽型の方が勝ちを占めたのではなからうか(93頁)

小論は結果として、この説を実例に即して検証することになった。まず、「訓点抄時代○○▽、名目抄時代●●▽、補忘記時代●●▽」と整理しておられる点について、このようにすべてを文節単位でとらえること自体問題を残すとしても、機械的にみれば、この方向に時代をおって推移したことは認められよう。しかし、「名目抄時代●●▽、補忘記時代●●▽」というのは、いささか図式化しすぎた嫌いがある。すでにみたように、『名目抄』にも

「時簡」のような●●▼型の例があった。また、『補忘記』で二拍名詞第三類+「の」は「夢の」●●▼一例しかなく、三拍以上の漢語に視野を広げると、「の」の低接する例も指摘できる。そうしてみると、●●▼型が一般的になったと確実にいえるのは、『平家正節』の時代まで降りそうである。なにぶんにも『名目抄』や『補忘記』の場合は、はっきりと傾向を見極めるにはあまりに例が少なすぎる。

つぎに、室町以降●●▼と●●▼の両型があることを、そのもとは後統語の高起・低起の別によるとされたが、この点は小論でも御説にしたがう。しかし、すべての場合に後統語の影響を被ったとは考えない。「の」という文節単位で、たとえば二拍名詞の場合に○○▼から●●▼となり、さらに後統語との複合の力によって平板化し、●●▼となる経緯も認めるべきものと思う。すなわち小論では、後統語の影響を被る場合と文節単位で変化する場合と、二様の道筋を考えるのであり、またそうでなくては多くの例を説明できない。前者には、後統語との複合において臨時的なものも含みはするが、なかには複合度の強い、一語的のものもみられる。その一方で、文節単位で考えなければ説明できないものも多い。これらは、「連体語の職能から言っても好ましい」平板型へと、●●▼▼●●▼という変化を経た。その結果、平曲では●●▼型が一般的になり、●●▼型になっているものほとんどは後統語の影響によるものとなったのである。

注(一) 『平家正節』は、おもに東京大学文学部国語研究室蔵青洲文庫本

を用いるが、適宜「尾崎本」(『平家正節』上下 大学堂書店 一九七四)、「京大本」(『平曲正節』一〜三 臨川書店 一九七二)、「早大本」(早稲田大学演劇博物館蔵本 ト27-12)、「芸大本」(石川幸子氏の御教示による)を参照した。

(2) 金田一春彦氏の御教示によれば、次のものはその好個の例といえる。

堯の代の(へ上上上上上)  
 堯の心の(へ上上上上上)  
 1上紅葉一八五折声  
 1上紅葉一九一折声

これらは『平家正節』の「紅葉」の章段に相接してでてくるものであるが(へ上)は高拍、(へ中)は低拍をあらわす、「堯(平声)」に続く助詞「の」のアクセントは、後統する「代・心」(それぞれ古く●、○○●)のアクセントによって定まる。右は、そのような変化の途中段階を反映した譜記と考えられる。

- (3) (5上小松 四5白声)
- (4) (8下落足 七3口説)(14下小宰 三1口説)
- (5) 鈴木(一九八五)
- (6) 秋永(一九八三)、以下同様。
- (7) 「現代京都」は『日本国語大辞典』および中井(一九八七・一九八八)による。
- (8) 上野(一九八七)
- (9) 秋永・後藤(一九八七)
- (10) 佐藤(一九八九)
- (11) 「木の葉」(1上卒都 六4口説)(灌頂原幸一七5指声)、「木の葉」(2上蘇武 六5口説)
- (12) (1下生食一六1白声) など。
- (13) (1下土佐 二3口説) など。



(14) 金井(一九八九)、以下同様。なお、声点・節博士は字音語は  
《》内、和語は《》内を示した。

(15) 尾崎(一九八〇)

(16) 『名目抄』は、とくにことわらないかぎり陽明文庫寛文十年本  
(近一二三〇―二二)、内閣文庫蔵尊海識語本(一四六―五六七)  
による。

(17) 数字は、各篇目の配列順、以下同様。ただし、陽明文庫蔵寛文十  
年本と内閣文庫蔵尊海識語本との間で配列順に異同がある場合には、  
内閣文庫本の方を( )内示した。

なお、声点は漢字に差されたものを《》内、仮名に差された  
ものを《》内示した。

(18) 香川大学附属図書館神原文庫蔵本(〇三一、二)

(19) 香川県大川郡志渡町多和文庫蔵本(一五―五)

【参考文献】

秋永 一枝(一九八〇) 『古今和歌集声点本の研究 研究篇上』(校倉  
書房)

(一九八三) 『言語国訛 竹柏園旧蔵本影印ならびに声譜索  
引』(アクセント史資料研究会)

(一九九一) 『古今和歌集声点本の研究 研究篇下』(再校  
校正刷)

秋永 一枝・後藤祥子

(一九八七) 『袖中抄 声点付語彙索引』(アクセント史資

料研究会)

上野 和昭(一九八七) 『平曲譜本にみえる姓・地名のアクセント』

(『徳島大学総合科学部創立記念論文集』)

奥村 三雄(一九八一) 『平曲譜本の研究』(校楓社)

尾崎 知光(一九八〇) 『四声并出合読誦私記』(『説林』28)

金井 英雄(一九八九) 『補忘記 語彙篇 博士付和語索引』(アクセ  
ント史資料研究会)

金田一春彦(一九六四) 『四座講式の研究』(三省堂)

(一九七二) 『音韻変化からアクセント変化へ』(金田一博  
士米寿記念論集) 三省堂)

桜井 茂治(一九六〇) 『助詞「の」のアクセント——和・漢語への接  
統の史的考察——』(『国学院雑誌』61―4)

(一九八三) 『尾崎知光氏蔵「四声并出合読誦私記」考——  
中世アクセントの資料として——』(金田一春彦博士古  
稀記念論文集)一、国語学編 三省堂)

佐藤 栄作(一九八九) 『アクセント史関係方言録音資料』(アクセ  
ント史資料研究会)

鈴木 豊(一九八五) 『古語拾遺 声点付語彙索引』(同右)

(一九八六) 『平安・鎌倉時代における助詞「の」のアクセ  
ントについて』(『国語学 研究と資料』10)

中井幸比古(一九八七) 『現代京都方言のアクセント資料(2)』(『アジア  
・アフリカ文法研究』16)

(一九八八) 『同(3)』(私家版)